蝶2種の飼育による観察から

入　江　照　夫

自然における蝶の羽化率は、5％以下だと言われている。自然界の掟とはいえ、蝶の外敵に対する防御力の無さが、ひとしお哀れに思える数字である。

逆に、室内で飼育した場合、種類によっては80％内至は90％、ギフチョウにおいては100％の実績もあり蝶の生命力の強さ、不思議さに驚きを感じる数字でもある。

羽化率100％の実績をもって昨年もギフチョウの飼育を手がけた。

先輩の蝶友、八木弘氏より卵を30卵頂きシャーレーで2週間の卵期を終え全数が孵化した。

翌朝鉢植のカンアオイを室内に持ち込み二枚の葉に分けて止まらせた。夕方帰宅して観察した所食痕が見られず、幼虫も又見当らない。再によく観ると幼虫を置いた葉の近くに殻の直径4ミリ程のカタツムリが満腹げに動いていた。植木鉢のどこかに潜んでいたのであろうか、私の不注意から春の陽に翅を広げる事もなくカタツムリの腹の中へ消えさせてしまった。
八木氏には申し訳なく誌面をもっておわびしたい。

同年10月1日に中学生の長男が学校の帰りにメスグロヒョウモンを採って帰った。

夏眠したとは思えぬ程新鮮な雌であった。早速水で薄めた蜂蜜を与え、採卵すべく飼育箱の中へスミレ・小石・枯草等と一緒に入れ産卵を待った。

翌日、スミレ等に産卵し箱の蓋の内側には500卵から600卵が蓋の色が変る程に産みつけてあり、まだ元気ではあったが母蝶を放してやった。

翌朝、シャーレに卵を移すべく飼育箱を開けると蓋の裏の卵が全く無くなっている。数百あった卵が40卵程残してあたり一面に銀色の粘液が付着していた。
箱の中をよく見ると体長12ミリ程のナメクジが丸々と太りスミレの葉に付いている卵を喰っている。
よく調べたはずの枯草かスミレに付いていたのか、これまたギフチョウの時と同じで私の不注意で多くのメスグロヒョウモンをナメクジの餌食にしてしまった。

幼虫でやられるのは理解出来るが卵のうちにやられるとは思わなかった。ナメクジ・カタツムリは共に腹足類柄眼目ナメクジ科の草食性の軟体動物であり、カタツムリのある種には食肉性のものもあるがどちらも若芽を常食とする草食性と思っていたし、ジャポニカにも、そう記している。認識を新たにすると同時に次回への良い経験であったと思っている。

室内においてさえ0％に近い数字が出る場合があり、自然に羽化した蝶が我々の眼に映るまでには幾多の外敵に逢うのであろうか。蝶に対する愛着が一段と深く感じられた一年であり、又昨年の我が家の蝶は天敵に加えて飼主の過信と不注意と言う二大天敵に壊滅させられた年でもある。

今年は再び過信をもってギフチョウ100％を目標に飼育を続けたい。

付記

メスグロヒョウモンの越冬前のデータ

10月1日　産卵
10月11日 / 10月15日　孵化

卵期10日から14日で孵化し、全く食餌することなくスミレの葉から降り、根元近くの小石の陰で春を待っている様である。

エゾスジグロシロチョウの採集記録数例

広　畑　政　己

これまで播州地域からの本種の記録は少なく、雪彦山と加古川市の記録があるにすぎない。

この度採集された標本を整理していたところ、採集記録の希な同地域の標本の中から本種を発見したので、他の地域のものと併せて報告する。

同定に当っては、発香鱗と発香嚢の大きさの対比(♂の場合）と前翅中室の鱗粉を除去した後のソケットの交錯度合（♀の場合）による区別法を採用して行った。

新川勉氏には同定方法の手ほどきをいただき、♀の同定をお願いした。ここに記してお礼申し上げる。また採集標本を御提供下さった相坂耕作、石井為久、入江照夫、尾崎勇、新川勉の諸氏にお礼申し上げる。

〈採　集　記　録〉

相生市三濃山	1♂	29 V	1978	入江照夫
神崎郡福崎町新	1♂	4 VI	1975	石井為久
朝来郡生野町奥銀谷	1♂	4 VI	1979	戸田智三
飾磨郡夢前町馬頭	1♂	9 V	1979	相坂耕作
飾磨郡夢前町雪彦山	1♂	4 V	1972	木下総一郎
養父郡大屋町若杉	1♀	12 V	1973	尾崎　勇
西脇市野村	1♂	14 IV	1973	木下総一郎
西脇市出合	1♀	13 IV	1978	尾崎　勇
津名郡北淡町江崎	1♂1♀	14 VII	1961	尾崎　勇